

## 令和7年度 第3回あさお福祉計画及び地域包括ケアシステム推進会議 摘録

1. 日時：令和8年3月6日（金）13時00分～14時30分
  2. 開催場所：麻生区役所 第1B会議室
  3. 出席者
    - (1) 委員  
吉松委員長、森副委員長、村井委員、高橋（慶）委員、岡部委員、玉野委員、佐野委員、依田委員、高橋（由）委員、植木委員  
欠席 吉垣委員、平井委員
    - (2) 事務局  
藤原事務局長、大塚地域みまもり支援センター副所長、雨宮地域ケア推進課長、池田地域ケア推進課長補佐、麻生地域ケア推進課主任、飯村地域ケア推進課主任  
(オンラインによる参加)  
鈴木地域支援課長、加来児童家庭課長、正木高齢・障害課長、前崎保育所等・地域連携課長、田島企画課長、相澤生涯学習支援課長、
  4. 次第
    - 1 開会  
事務局長挨拶
    - 2 議事
      - (1) 麻生区における福祉の新たな可能性について  
・「ピカソ・カレッジ新百合」のアート活動  
・高齢者によるAI活用事例発表会
      - (2) 第8期麻生区地域福祉計画策定について 資料1
      - (3) 第7期麻生区地域福祉計画の進捗状況について 資料2
      - (4) その他
    - 3 閉会
- 【配布資料】**
- 委員名簿  
座席表  
あさお福祉計画及び地域包括ケアシステム推進会議開催運営等要綱  
資料1 第8期麻生区地域福祉計画の方向性について（案）  
資料2 第7期麻生区地域福祉計画の進捗状況（12月末日時点）  
参考資料 「知ってほしい！～乳がん・子宮のがん～」チラシ  
参考資料 高齢者AI事例発表会 アンケート回答
5. 公開・非公開の別 公開
  6. 傍聴者 1名
  7. 議事摘録

1 開会  
2 議事

(1) 麻生区における福祉の新たな可能性について

株式会社アイム サービス管理責任者の新家氏より、ピカソ・カレッジ新百合のアート活動について紹介がなされた。

(紹介内容)

- ・ピカソ・カレッジ新百合は新百合エリアに2か所あり、古沢ではアート活動を中心に、金程では午前中に利用者全員で調理を行い、作った食事を両事業所で昼食として提供している。包丁を持つことが難しい利用者にはキノコを手でほぐすなど、個々の能力に合わせた役割を担ってもらい、徐々にできることを増やしながらか成感を味わっていただけるよう支援している。
- ・事業所では、外部からの注文による缶バッジ制作や、書類発送時に使用する封筒の宛名の押印作業などにも取り組んでおり、これらはすべて利用者の工賃となっている。生活介護では工賃の支払いが必須ではないものの、私達はできる限り工賃につながる活動を取り入れている。また、余暇活動としては卓球などのほか、ダンスが好きな利用者が多いため、ダンスを取り入れている。
- ・古沢のアート活動では、昨年開催された「第2回かながわともいきアート展」において利用者の作品が知事賞を受賞した。これを受け、黒岩知事が古沢のピカソ・カレッジに訪問された。受賞者が描いた知事の似顔絵と、小さなフレームに入った其々の作品に裏にメッセージを入れてプレゼントしたところ、知事から喜びの言葉を頂いた。受賞作品「イカれた女」は、今年の秋の10月頃に、知事の執務室に展示される。納品の際には、スタッフとともに本人が知事室に訪問する予定である。
- ・OPAのバレンタインイベントでは、小さなアートフレーム作品を展示した。また、2階ギャラリーでは廃材シートを活用したアート作品を展示した。利用者とともに会場を訪れ、記念撮影を行ったほか、ブログやSNS(インスタグラム)で情報を発信し、皆さんに知って頂けるよう活動の周知に努めている。
- ・アート活動は、本人やご家族の喜びにとどまらず、作品が利用者の生活の糧や将来の生計につながっていくことを願い、日々工夫しながら支援を行っている。また、作品が展示されることで、利用者一人ひとりが「次は自分も頑張ろう」と意欲を高めるきっかけとなり、次の活動へのモチベーションにもつながっている。

(質疑応答)

依田委員 ピカソ・カレッジさんにはこれまで伺ったことがなく、本日、初めて話を伺いましたが、とても気持ちのいい空間だと感じました。また、利用者の方のために非常に熱心に取り組まれていることが伝わってきました。そこで質問ですが、麻生区内には他にも生活介護事業所がある中で、違いはどのように理解すればよいのでしょうか。どのような点を大事にされているのか、あるいは特徴といえる点について教えていただければと思います。伺った限り、障害がある・ないといった枠を超えて、とても良い関係性が築かれているように感じています。福祉においては、こうした関係性が大切なのだろうと改めて思いましたので、その特徴や大事にされている点について、お聞かせいただければと思います。

新家氏 スタッフは女性が多く、母親としての立場でもあるので、子どもへの関わり方について自然と理解があります。障害の有無にかかわらず、やってはいけないことは「障害

があるから許される」ということではなく、必要な場面ではしっかりと伝えるようにしています。また、スタッフの多くが未経験からのスタートであり、利用者への関わりは教科書通りにはいかないため、「これはダメだったので次はこうしてみよう」と試行錯誤を重ねながら支援を行っています。うまくいった対応はスタッフ間で共有し、「自分もやってみる」「この利用者には合わなかったので別の方法で」など、日々改善を続けている。生活介護にもさまざまな形があるが、当事業所では古沢ではアート活動をメインにしています。一方、金程では午前中にみんなで調理を行い、作った食事を一緒に食べることを活動の中心としています。「自分たちで作るとおいしいね」といった声もあり、調理活動が利用者の楽しみになっています。保護者からも、お弁当形式の事業所が多い中で「手作りの食事はありがたい」との声をいただいております、今後も継続していきたいと考えています。

依田委員 アートに拘ったのは意味がありますか。

新家氏 開設当初に最初に利用されたのが、今回知事賞を受賞した利用者でした。彼は麻生支援学校のアートコースに在籍しており、当初から絵を描く力が非常に高かったこともあり、アート活動に力を入れるきっかけとなりました。展示活動は、まず年に一度、麻生市民館の市民ギャラリーで開催する作品展から始まりました。今年で6回目を迎えますが、これに加えて、近年では商業施設の OPA でも年に数回展示の機会をいただくようになり、少しずつ作品を発表する場が広がっています。

依田委員 お話を伺って、理解の仕方がよくわかりました。最初は、何か特別な方向性や専門的な考え方に基づいて取り組まれているのかと思っていましたが、今のお話を聞くと、まさに一人ひとりに合わせた個別支援を丁寧に積み重ねてこられた結果が、現在の形につながっているのだと感じました。「母親の目」という言い方もされましたが、通常の方の視点で“どうすればその人可以できるか”を積み重ねてこられたことが、こうした形につながっているのだと理解しました。感服しました。ありがとうございました。

佐野委員 ピカソ・カレッジさんについては以前から存じ上げています。年末にアートガーデンかわさきで開催されている障害者作品展に関わっていますが、数年前から展示会場の一角にピカソ・カレッジさんの作品コーナーが設けられました。正直申し上げて、レベルの高さを感じています。細かな描写や色の使い方など、芸術性の高い作品が並んでおり、とても印象的でした。また、以前から話題になっている有名な男性の方、ニューヨークなど海外でも発表経験のある「GAKU」さん（古沢に所属している）の作品も拝見しました。色づかいなど、独自の表現性が非常に高く、やはり、才能に特化していると感じました。最近では「発達障害」という呼び方も見直され、「神経発達症」といった言葉に変わりつつありますが、そうした特性を持つ方の中には、芸術的な分野で力を発揮される方が多くいらっしゃいます。仙台でも、自閉症の双子の方が「ヘラルボニー」という取組で、丸の内の大規模ギャラリーで展示を行われ、作品がネクタイやワンちゃんのグッズになるなど、数万円で販売されたとも伺っています。福祉だから、障害があるから、という枠ではなく、純粋に芸術性が評価され、高い価値として世間に受け止められていることは非常に素晴らしいと感じています。その一方で、身体障害の方の支援に関わっている関係から、ピカソ・カレッジさんの

利用対象について確認したい点があります。私どもの会の方が古沢の事業所を見学した際、建物が必ずしもバリアフリーではないと感じたという話がありました。物理的な環境面から、身体障害のある方が利用するにはハードルが高く、主な対象者としては、発達障害の方や自閉症の方が中心という理解でよろしいでしょうか。

新家氏 週に一度、車いすを利用されている方が通っているが、その方は、つかまれば歩けるという状態です。どちらの施設も階段があって、その昇り降りが課題になっています。階段の一部には手すりが設置されていないところもあり、そこをクリアできればとなりますが、基本的には、区分3以上であれば利用できる施設で、随時見学を受け付けています。それから、3月14日（土）に新百合総合病院で「知ってほしい！～乳がん・子宮のがん～」という講演会が開かれます。その際、保護者と一緒に来られたお子様を対象にしてワークショップを開催させて頂くことになりました。内容としては、花びらの形に切った粘土をボードに貼って写真撮影をしたり、ペットボトルのキャップを使って、傘などにつけるマーカー等を作る予定です。まだ空きはありますので、ぜひご参加いただければと思います。

植木委員より、麻生市民館ギャラリーで開催された「高齢者によるAI活用事例発表会」について、報告がなされた。

(報告内容)

- ・1月26日から29日の4日間、市民館のギャラリーで展示を実施した。市民館は人の出入りが多く、フリーで入ってくださる方も多かった。私自身も普段、美術展示を見るときは「ぱっと見て、ぱっと帰る」ことが多いのですが、今回は皆さんゆっくり丁寧に見学されていたのが印象的であった。
- ・アンケートにもご協力いただき、81人の回答をいただきました。参考資料に添付しているものがその集計である。内容としては、「AIでこんなことができるとは驚いた」「シニアの方々が挑戦している姿に感動した」などの声が多く寄せられました。また、琴線に触れた感想として「新しい世界が開けた。高齢者のおもちゃのようですね」といった声もあり、シニアの活動そのものに対する評価もいただいた。
- ・AIを活用した事例について動画の視聴（白黒写真のカラー化、孫の写真を成長した姿に具現化、写真の動画化）。当日は、この他にもChatGPTでの会話の例など、様々な形で紹介している。
- ・今回の展示会で感じた点は3つある。1つ目は、AIの可能性を知らない人がまだ多い一方で、シニアの方々の関心が非常に高いという点。2つ目は、この会議でも話題になっている認知症予防にAIをうまく活用できるのではないかという点。3つ目は、引きこもりに伴う「うつ」の予防や、新しいつながりづくりにもAIが寄与する可能性があるという点である。
- ・その後の取組として、アンケートからシニア向けAI講座への関心が非常に高かったため、興味を持った13名の方が新たな二期生となり、今週の火曜日に第1回目をスタートさせた。キャッチフレーズは「AIが生み出すシニアの幸せ。安心と楽しみのための頼もしい味方」というもので、この活動が三期生、四期生へと広がっていけばと考えている。
- ・今後も高齢者がAIに触れる機会を増やしたい。3月13日から市民館の壁面展示で今回の内容を紹介する予定である。6月25日には金程の老人福祉センターでAIに触れる講座が企画されると伺っている。こうした動きがあるということを、この会議でも共有し、引き続きご支援い

ただければと思う。

(意見交換)

依田委員 素敵なものを見せていただき、ありがとうございます。このシニア AI クラブ、本当にすごいですね。参加したくなるような活動だと感じました。そこで、具体的に「参加するための条件」や「参加方法」について教えていただければと思います。

植木委員 現在のところは、実際に展示をご覧いただき、アンケートで「参加したい」と希望された方にご案内しています。条件としては、いわゆるパソコン教室ではありませんので、インターネットにつなぐ基本的な操作ができることを前提としています。また、理論よりも実際に手を動かしてもらうことがベースなので、実際にノートパソコン持参していただいて実習を受けてもらう、という形で行っています。

依田委員 定期活動なのでしょうか。

植木委員 運営の内容としては「2か月に1回のサイクル」で進めていこうと考えています。なぜ2か月かかというと、まず初回の授業で学んだ内容を、約1か月間ご自身で実習していただきます。その上で、次の会議で、実習の中で出てきた疑問点やわからなかった部分を解消して、次のステップに進む、という流れにしているためです。このサイクルが進めると、年間では5回程度の開催になります。そして最終的には、今年実施したように、活用事例の展示会を二期生の方にも発表していただく予定です。そこからさらに三期生、四期生へと活動が広がっていくことを期待しています。麻生区は高齢者が多い地域ですので、シニアの皆さんの間で、こうした AI に触れる文化が育ち、他の区に比べて先進的に進んでいけば、それは麻生区にとって誇らしいことになるとはなないかと考えています。

依田委員 シニアの定義は、何歳以上ですか。

植木委員 その辺はアバウトにしています。また、今年も10回連続講座「アクティブに生きよう、人生100年時代を」を開催する予定です。その中でもこうした活動を紹介していきたいと思っています。その節は社会福祉協議会の皆様にも一部門を担当、ご協力いただきたいのでよろしくお願いします。

村井委員 これまでの福祉を振り返ると、「弱い部分」や「弱者」「課題」に焦点を当てて、どう改善するかを議論することが多かったと思います。しかし今回の事例では、「強みをどう伸ばすか」という視点に大きく着目されており、非常に印象的でした。ピカソ・カレッジさんの取組では、本人が持つ強みを生かしながら、共生社会をどのように形づくっていくのかという点に明確にフォーカスされています。もちろん、障害のある方やご家族には多くの課題やご苦勞があるのは事実ですが、そこにだけ目を向けるのではなく、可能性や強みを前面に押し出すことで新しい価値が生まれていると感じました。マネジメントや経営戦略の分野でも、課題をいくら解決しても「普通」に近づくだけで、強みを伸ばすことによってこそ独自性が育ち、弱みが自然と目立たなくなると言われています。地域福祉においても、こうした考え方が十分に活かせるのではないかと感じています。同様に、高齢者の AI 事例発表会、シニア AI クラブで

は、「高齢者×AI」という一見遠い組み合わせが、実際には非常に力強い成果を生み出していました。AI との協働が、本人のエンパワーメントに繋がり、成果が目に見える形で積み上がっていることが印象的でした。今回の共通点は、いずれも「強み・前向きなエネルギー」に焦点を当て、それを発信していく「発信型」の仕組みを大切にしている点です。成果が見えることで、多くの市民を巻き込みやすく、楽しく参加できる取組につながっていると感じます。従来の福祉活動では、この視点がやや弱かった、あるいは遠慮してきた面もあったかもしれませんが、いよいよ花開き始めたように思います。まさに転換期を感じる内容でした。今後も、「強み」や「前向きなエネルギー」に着目し、これまでの活動をその視点から改めて評価し直していくことが重要だと考えています。現在の取組を否定するのではなく、その中にある力強さをどう表現するか。そして、活動を内側だけで完結させるのではなく、積極的に外へ発信していくこと。こうした視点を取り入れることで、サロン活動、防災活動、見守り活動なども、これまでとは異なる表現や広がり生まれるのではないかと感じ、非常にワクワクしました。また、田園調布学園大学では、大学の学生と、町会の百合ヶ丘献交会の皆さまと一緒に、スマートホンの使い方をゆるやかに学び合う場にしていく計画です。この講座で大切にしたい点は、目的を堅苦しく掲げるのではなく、無理なくゆるく続けられる形で取り組むことです。ボランティア活動についても、「いつでも断ってよい」「参加できない時があっても大丈夫」という、気軽に関わられるスタイルを取り入れたいと思っています。「今回は参加できませんが、次回は行きます」といった形で、負担なく参加できる仕組みを大事にしながら、交流の場を育てていく考えです。また、今日の発表で共有された「一緒に取り組むことでどのような強みが生まれ、どんな前向きなエネルギーが湧き上がるのか」という視点を、このスマホ講座にも活かしていきたいと思っています。取組を外に向けて発信していく「発信型」の姿勢も欠かせないため、今後はこの活動についても積極的に情報発信していければと考えています。ゆるやかで参加しやすく、かつ力を生み出す取組として、今後も皆さまからの発信を楽しみにしております。

高橋（慶）委員 質問ですが、シニア AI クラブやアクティブの連続講座の広報について、地域の皆さまへの周知はどのように行う予定でしょうか。今後の広報の方法についてお聞かせください。

植木委員 本日の発表については、これらの活動を麻生区全体としてPRしていただきたいという思いを込めて紹介しました。各分野で大変活躍されている皆さまですので、今日ご参加の皆さまも「いいな」と感じたのでしたら、ぜひ地域に広めていただければと思います。また、私自身の実感として申し上げますと、ペーパーだけで伝えるよりも、今日ご覧いただいたように、動画などを見て「わあ、すごい」と感じていただくことが一番大切で、そうした驚きが、広げていく上で最も重要なポイントだと思っています。

高橋（慶）委員 市民館の回覧、市民館だよりには掲載されるのでしょうか。

植木委員 はい、市民館だよりに掲載していただいています。それから、やはりギャラリーという場は、人を呼び込むうえで非常に効果的だと感じています。自由に立ち寄れる場所

であるため、多くの方がふらっと入って来られます。私としても、フリーの来場者の方々に実際に作品や活動をご覧いただき、そこで「感動してもらおう」ことを一つの狙いとしていました。その意味でも、今回は多くの方に見ていただく機会がくれたので、非常に良かったと思っています。

## (2) 第8期麻生区地域福祉計画策定について

・資料1をもとに事務局より第8期麻生区地域福祉計画の方向性について、独自ツール（案）も含めて説明した。

依田委員 新しい取組として、今回「独自ツール」を採用されたとの説明がありましたが、その点について、まだ詳しく理解できていない部分があります。これまでの作り方や従来使用していた手法と比べて、今回のツールでは何が変わり、どのような点が新たな展開につながっているのか、もう少し具体的に教えていただけますでしょうか。このツールの導入にあたり、市としてどのような前提や意図を持っているのかについても、併せて補足説明をお願いしたいと思います。

事務局 市計画の冊子と区計画の冊子が今回から合冊となり、その結果、区計画として掲載できるページ数が十数ページと、これまでに比べて大幅に少なくなっています。そのため、冊子に載せきれない区取組などについては、補完的に情報を提供できるよう、区の判断で「独自ツール」を作成できる仕組みになっています。あくまで区の任意の取組ではありますが、限られた紙面を補うために活用していくという位置づけです。

依田委員 不足分を補うために、ソフト面で、よりビジュアル化した形で情報を提示できるツールを作成する、という理解でよろしいでしょうか。

事務局 そのとおりでございます。独自ツールの形については、区に委ねられており、小冊子のような形式にしてもよいですし、その他のツール的な形式を選ぶことも可能です。さまざまな形態で作成できるという点が特徴です。先日、柿生地区社会福祉協議会さんに伺い、団体の皆さまにヒアリングを行いました。その際にも「福祉計画はなかなか手に取ってもらえない」「内容が分かりづらい」というご意見をいただきました。市の計画も100ページ、区の計画も100ページと分量が多く、なかなか読みにくさがあるという課題があります。今回、市計画と区計画が一冊にまとまることを踏まえ、より区民の皆さんに手に取っていただきやすく、興味を持っていただける形にしたいという思いがあります。たとえば、先ほどのピカソ・カレッジさんの作品など、区の特徴や理念が伝わるビジュアルを活用することで、「麻生区ではこんな取組があるのだ」と感じていただける工夫をしたいと考えています。そうした背景から、今回の独自ツールについて、このような形がよいのではないかと提案させていただいているところです。

依田委員 そうしますと、本体の冊子のボリュームが小さくなるという点についてですが、単にページ数が減るというだけでなく、内容の書き方そのものを見直すなど、構成や表現の仕方も含めて変更されるという理解でよろしいでしょうか。

事務局 本体の計画冊子については、市のほうで大まかな構成枠があらかじめ定められています。たとえば、「このページにはアンケート結果を掲載する」「ここには地域圏域の

特性について記載する」など、項目ごとに入れるべき内容が決まっています。そのため、区としては、その決められた枠の中に情報を当てはめていく形となり、冊子の内容や表現はあまり柔軟性のある体裁にはできません。

依田委員 分かりました。前回の計画では、各区ごとにレイアウトや見せ方を工夫されていたことが印象に残っていますし、「もっと読みやすくしてほしい」という声も会議の場に出ていたと記憶しています。そうした方向性を踏まえた改善ではない、という理解でよろしいでしょうか。

事務局 それとは大きく異なり、今回の計画冊子については、すべての区で統一した形式に整理される方針となっています。計画は共通のベースで記載されるため、前回のように各区が独自にレイアウトや構成を工夫する形式ではありません。章立てなどの詳細な構成や、掲載できる情報については、これから市より提示される見込みです。

依田委員 よく分かりました。これまでの麻生区の計画冊子については、情報が細かく書かれすぎていたり、内容がバラバラに配置されていたりして、全体として「どんな方向性を目指しているのか」が読み取りにくい部分があったと感じています。そうした意味では、今回、冊子のボリュームが小さくなること自体は、むしろ良い方向だと私は思っております。そこで伺いたいのですが、計画の項目や構成が市の方で統一されるとのことでした。その項目や内容が、区民にとって本当に分かりやすく整理されたものになるのかどうか、そのあたりの状況についてお聞かせいただければと思います。

事務局 それは、これから議論検討されるところで、今の状況はこちらの資料で示されている、区ごとの独自方針や取組、地域ケア圏域の特徴、これらを掲載していきましようという話で進んでいます。

依田委員 そうなると調整がかなり難しいですね。市と区で合わせて作成する形になるということで、大変な作業だと思います。

事務局 本体の計画冊子については、市の統一フォーマットに沿う形になるため、区としての自由度がこれまでより下がってしまう。その分、独自ツールを活用し、各区の特色を伝えていくことが、現時点での方向性となっています。

依田委員 承知しました。これはもう、抗いようのないことなのだろうと思います。そういうことになりますね。

事務局 逆にいえば、独自ツールの中では、これまで計画には掲載しにくかった民間企業との連携なども盛り込むことができます。計画には外されている取組でも、「これはぜひ麻生区として紹介したい」と思う内容についても掲載できるため、かなり柔軟な冊子を作成できるのではないかと考えています。

村井委員 依田委員さんからの質問は、非常にクリティカルというか、大事なところでございまして、まず、テンプレートが存在するということは、各区の負担を減らすという点が大きく、同時に、川崎市としての計画に一体感を持たせるという意味でも意義があるかなと思います。つまり、各区のオリジナリティは、基本的な市民に対するサービス

の枠組みが示された上で、それを区の特성에合わせてどう展開するのかという「過不足ない」サービスとして発揮されるのがよい、という考えです。一方で、ユニークなものがそぎ落とされるという弱点はあり、そこを補うために独自ツールが活用・作成されていくのだろう、という理解です。この点は、妥当なやり方なのかと思っていません。ただし、地域福祉計画は構造化された計画なので、市計画と区計画には構構性が必要です。一般的には、市計画を先行して作り、共通方針・大きな柱を示した上で各区計画が具体化する、あるいは各区計画を先に作り、共通事項を横断的に抽出して市計画へ反映する、という流れのいずれかが合理的だと考えます。これを同時に作るとなると、区と市が相当密に連絡を取らないと、書き方の枠組みだけが統一され、中身では市と区が乖離するおそれがあります。一本柱でなくなってしまう怖さがあるので、ここは市に対しての苦言として、そのやり方で大丈夫ですかというのが本音です。もう一つ、独自ツールについては私も大賛成です。ただ、本質的には川崎市の中の麻生区ですから、市と区の柱をきちんと踏襲した上での独自性でなければならず、話題性のためにとがりすぎるのはよくないと思います。たとえば外れ値の珍しいことをやりました、麻生区はとんがっていますね、という派手な演出のためのものではない。私はどちらかという、独自ツールは区計画の実行性を万全にするためのツールとして位置づけたい。つまり、団体や個人といった社会資源、仲間・パートナーの具体的な行動変容とネットワークづくりに資する設計であるべきで、対象者と期待する行動が明確でなければもったいない、ということです。どうしても誰に向けて語っている計画なのか、不明瞭になりがちで、行政と一部の人たちが頑張ります、という意思表示に留まり、結局は行政にお任せ、という流れが生じやすい。私は、地域福祉計画とは役割分担とパートナーシップの計画だと考えています。ですから、やっぱり各区民が毎日の行動の中で「何をすべきか」にまで訴求し、一人ひとりの小さな変容、小さな行動の積み上げが小地域の変化を生み、横のネットワークを強化することで、持続性や継続性、発展性のあるセーフティーネットや、早期発見・早期対応、自助・互助の活動が生まれ続ける、そういう循環を意識したツールである必要があると思います。広報やパンフレットといった「発信型」は重要ですが、読後にどのような行動変容を促すかという仕掛けが不可欠です。今回のように新しい福祉の取組が二つあるのならば、その二団体がコラボレーションするきっかけを生むように設計されていないともったいない。ツールの中に登場する人たちの横のつながりが、作成過程でどんどん形成されていくことも、非常に重要だと感じました。以上、その実効性をどう担保するのか、という視点を満たすツールになればいいな、というのが私からの願いです。私個人の見解ばかり述べても仕方ありませんが、学者的な視点からも意味はあると考え、提案として申し上げました。

### (3) 第7期麻生区地域福祉計画の進捗状況について

- ・資料2をもとに事務局より第7期麻生区地域福祉計画の進捗状況について、前年度の数値と比べて大きく変動見込のある取組を中心に説明した。

植木委員 第2回の会議でもご報告がありました、麻生区・多摩区ソーシャルデザインセンター共催のイベントについてですが、村井先生も登壇されたようでございます。その時、私が申し上げたのは、老人から学生まで、幅広いスタンスで大変ですね、というお話だったと思います。ただ、何かイベントをやる、何かやった、という形で終わるのは、行政の姿としては望ましくないと思うのです。こうしたイベントを実施して、そこに課題が生まれたのであれば、その課題をどの部門がどういう場合に担い、これからどのように発展させていくのか、という内容を、第8期の計画の中にぜひ盛り込んでいただきたいと期待しております。もし現在進んでいるものがあれば、ご披露いただければと思います。

事務局 今回は、ソーシャルデザインセンターと地域包括ケアシステムの講演会を、抱き合わせのような形で開催させていただきました。私たち事務局側としても、非常に勉強になったと感じております。植木委員がおっしゃるように、これからにつなげていく上で、良い題材になったと思っております。また、来年度についても講演会の企画は進めていきたいと考えております。その際、今回の取組につなげるのか、あるいは別の形にするのかは、これから整理が必要だと思っておりますが、何かしら今後の展開につながるようにしたいと考えています。その中で、こちらの委員の皆様にもご協力をお願いする場面が出てくるかもしれませんし、ご要望やご意見があれば、ぜひお寄せいただければと思っております。

植木委員 ぜひやっていただけたらいいと思うのですが、この方々の悩みというのは、講座をやること自体ではないと思うのですよね。その悩みをどういう場面で聞いてあげて、我々がどういう場合に対応してあげるのか、そこが重要だと考えています。ですので、その点について、どの部門で対応されるのか私は分かりませんが、しっかり担当なり体制を作っていないといけない。講座をやるというのは、私はあまり感心しないです。実は、講座をやるだけだと行政の仕事にしてしまうだけで、あまり意味がない。やはり、本当の悩みを聞いて、そこから課題が生まれたのであれば、その課題を具体的に潰していくようなアクションをすることが、講座の後に必要だと思っております。ぜひ、そういった気持ちを持っておりますので、ご理解いただきたいと思えます。

岡部委員 検索サイトの担当者会議は、今年度は1回しか開かれていないということで事務局から説明がありましたが、実は今年度、検索サイトの画面を画期的に改修しました。検索の仕方も、今まではキーワードでヒットしないと出てこなかったのですが、活動分野別にもヒットするように抜本的に改善したところです。毎月、区民の方がどの程度アクセスしているのか確認していますが、最近は5割ほどアクセス数がアップしてきており、検索サイトの改修効果が出てきているのかなと感じています。そうした状況を見ながら、来年度に向けて検索サイトの担当者会議も引き続き実施していきたいと考えています。会議は1回だけではあるものの、活動自体はしっかり進めている旨、お伝えしました。

#### (4) その他

・前回会議で検討した、将来の民生委員・児童委員の担い手につなげていくための事業企画案について、

「若い世代にも気づいてもらえる広報を。」という意見を受け、3月20日の子育てフェスタ内で、民生委員・児童委員に関連したクイズブースを出展する旨、説明した。

植木委員 先ほど説明した10回の連続講座の中で「終末医療」のテーマを取り上げたいと考えています。麻生区はこれだけ高齢化が進んでおり、いわゆる看取り、終末医療の考え方というのは、高齢者の方々が大変興味を持っておられます。そういう意味で、今度の14日にトゥエンティワンホールで「市民のための在宅医療フォーラム」というものが開催されます。主催が「麻生区在宅療養推進協議会」となっていますが、この協議会がどのような存在なのでしょうか。

事務局 在宅医療推進協議会については、まず川崎市全体として大きな協議会があり、そこには医師会の先生方をはじめ、さまざまな職種の方や市の職員も参加し、会合を持っています。その上で、各区ごとに「区の在宅療養推進協議会」が設けられており、麻生区にも同様の協議会があります。麻生区では、在宅療養に携わっておられる医師の先生方を中心に、推進協議会を構成しており、在宅看護・在宅介護などの関係者も参加しています。麻生区では、年に1回、大きなフォーラムを開催することが恒例で、年度のまとめの会という位置づけになっています。

植木委員 高齢の方々も関心が高い分野ですので、ぜひ、麻生区の在宅医療・ケアシステムについて講座の中でご紹介いただければと思います。

事務局 終末医療というのは在宅医療とイコールではなく、終末医療の中の一部が在宅医療であり、選択肢の一つにすぎません。在宅もあれば、施設もあり、病院で亡くなる方も多くいらっしゃいます。そのため、どういった形でお答えするかについては、また相談しながら進めさせていただければ、と思います。

依田委員 先ほどの説明から、第8期地域福祉計画のスケジュールが非常にタイトだと感じました。そのため、6月の次回会議の前に、市のご担当者からオンラインなどで詳しい説明をいただくことは可能でしょうか。また、川崎市として「第8期はこのように作ります」という内容が、YouTubeなどで既に公開されているようであれば、その紹介でも構いません。ただ、あまり簡単すぎる内容では意味が分からないため、もう少し詳しい情報が得られる方法があればご提示いただきたいと思います。いかがでしょうか。

事務局 前回もかなりタイトなスケジュールで、直前まで市の検討内容を知らされなかったということがありました。今回は、できるだけ早くその内容を知らせてもらえるよう、市と調整していきたいと思っています。そのうえで、オンラインでの説明などの対応が可能かどうかについては、こちらでも検討しながら調整したいと考えています。申し訳ありませんが、この場では明確なお答えができませんので、ご了承ください。

村井委員 当然、組み込まれているとは思いますが、やはり7期の総括をしないと8期の出だしができない、という点が重要だと思います。PDCA サイクルを回すうえでは、特にCとAが非常に重要であり、この3年間の総括をどのタイミングで行えるのかが気になっています。8期の策定が始まり、7期の最中と来年度が同時期になるわけですが、かなり早めに総括をしておかないと、計画の柱立てをそこから作り始めることに

なり、6月を過ぎてから振り返りをするとなると、本当にドタバタになってしまうのではないかと感じています。そのあたりだけは、ある程度早めに振り返りをしておいたほうが良いと思いました。

事務局 振り返りと言いましても、まだ2年しか過ぎていない状況です。今期の3年目に入りながら次期の計画を立てなくてはならず、同時並行で進めるのは、かなり厳しいところだと感じています。

依田委員 第8期も3年間でしょうか。すごく早いと聞きましたが。

事務局 はい。

村井委員 5年が多いですね。ただ、5年とすると、最近は将来がなかなか予測できないですね。

依田委員 3年で回しつづけるしかない。忙しいですね。

事務局 それこそAIの力を借りるしかない。

依田委員 いや、そこは村井先生の力を借りた方がいい。

村井委員 かつてに比べて、はるかにAI精度が上がったので、いわゆる文字の方ですね。文章生成型のAIのところのすごさはあるので、もう活用するしかない。ベンチマークとしてもレベルが違いますので。

依田委員 話を戻しますが、社会福祉法人も年に1回、今日のように報告を行い、総括をして計画書を立てていくのですが、計画を立てる時期のほうが早く、3月にはもう作らなければいけません。一方で、報告書はだいたい5月頃に登記のほうへ提出することもあり、その時期に報告を行うため、順番が逆転してしまっている状況です。そのため、やむを得ず、仮の、簡単ではありますが肝になる部分だけをまとめた簡単な総括書を計画を作る時点で用意し、それを添付して計画づくりをするようにしています。いずれにしても、何らかの形で、細かい数字ではなくても、この間にきちんと進められているのかどうかを振り返ることは必要であると思います。数字が変わっていない項目もありますし、毎年同じぐらいの内容でやっていると、本当に計画の目標に到達できるのかどうか、手応えが分かりにくくなっています。そういう意味でも、見直しはすべきことだと感じました。以上です。

### 3 閉会

次回、次期福祉計画独自ツール作成委員会の委員選出をする旨、確認。

14時26分閉会（次回は令和8年6月26日（金）13時～ 麻生区役所第2会議室）